

「綿実油」を絞り続けて120年

weekly カタログ補足

国内の綿の栽培に こそろ寄せ
応援してくれる大阪・柏原市の

「岡村製油」 綿実油ご紹介



昔の压榨機



みんなで育て
みんなで綿繰りした綿実を
搾って
「ダイヤモンドGブランド」
復刻版の缶に詰めてもらいました

压榨一番絞り 綿実油

11

美味しくって身体にいいサラダ油の大様、綿実油は色々な料理に合います。
天ぷら、揚げ物、総菜、サラダ、パスタ、手作りマヨネーズ・・・

綿実油の特徴



おいしさを感じる油

綿実油は、上品な風味とコクを持つ、軽さが特徴の食用油です。油もの苦手な方も胸焼けしにくいと好評です。



オクタコサノール

綿実油にはスタミナをつけ脂肪を燃焼させる作用を持つとされるオクタコサノールが含まれています。



体にやさしい油

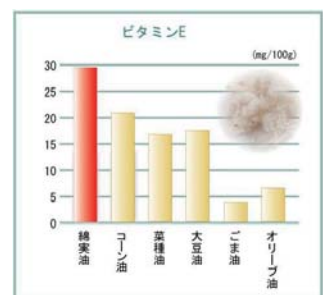
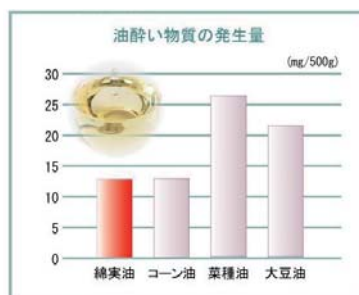
綿実油は細胞の老化を防ぎ、癌の予防に効果があるとされるビタミンEを多く含んでいます。

油酔いしない油

綿実油は、揚げ物料理時に臭いの発生が少なく油煙しにくくとされる、お母さんにもやさしい油です。

- ①油酔いしない
- ②胃もたれしにくい

- ③油きれよくあっさり
- ④冷めてもおいしい



生協新本部の電話番号は tel : 0297-48-4911 (以前の番号) に戻ります。

みんなで綿繰りした綿実の搾油ラインへの投入をしてきました！ (2/18)



関西本線柏原駅を降りて水路をはさんで岡村製油の大きな工場敷地があります。



国内の市民による綿作りに関心を寄せ「皆さんの綿実を搾って油にしましょう」とずっとめんどろをみて下さった岡村製油取締役の松井俊隆さん。工程を説明してくれました。



近代的な工場の真ん中に古くからの平屋の事務所が残っていてそこが本社事務所になっていました。私たち常総生協はじめ全国から集まった市民の手の綿実をこれから搾油ラインに入れます。松井取締役が自ら軽トラに積んで



袋から出して搾油ラインに流します



最後の脱臭工程の建物



さまざまな工程を通過して



ラインを流れる綿実



新センターの施設・設備の特徴の紹介（1）



【施設設計】

1. 駅に近く地の利が良いかわりに、規模に応じたコンパクトな設計としました。
2. 組合員室・調理実習室を広く取り、事務所とも連続したオープンな空間とし、組合員・生産者・職員が一体となれる協同の空間としました。
3. 放射能検査や食品検査を実施する「検査室」を専用に設置しました。
4. 土地の余力を残してあり、第二次計画として朝市やアンテナショップ増設を二次計画としています。

【設備】

1. 空調は「木質バイオ・ペレット」冷暖房にしました。
2. 公害企業「東京電力」からの受電を解約しました（ミツウロコからの受電に）。
3. 照明はすべてLEDにしました。
4. 玄関からエレベータ・トイレを含め、フロアは原則バリアフリーです。
5. 井戸を掘り、トイレ用水と共に屋根に常時散水して冷暖房効率を上げます。
6. 冷凍庫地下の冷気を食品ストック仕分け室に送り込み夏場の商品温度管理に利用しています。
7. 冷凍庫・冷蔵庫の前に前室を設け、農産品の予冷庫としても使います。
8. 雨天時トラックへの商品積込の際に商品が濡れないための庇を長く取りました。

【これからのお願い】

1. 子どもたちといっしょに使う組合員室での絵本・文庫、おもちゃ等の寄贈のご協力をお願いします。
2. みんなで共有財産を活用する中で、増進運動をすすめます。

福島原発2号機格納容器が異常な温度上昇・・・(2015.4.3)

4月はじめより組合員さんからも「福島第一原発で何かあったのか?」「ネットでいろいろな情報が飛び交っていますが大丈夫ですか?」等の問い合わせがありました。

福島第一原発2号機で、格納容器の一部(下の左図の赤丸部分)が、それまで20℃以下で推移していたものが、4月3日急に71℃、さらに最高88.5℃まで上昇しました。

温度計は「熱電対」と呼ばれる温度計(二種の金属の接合点で発生する電圧を測る温度計)のようですので、断線などではゼロを示しますが、数値を示しているのが故障ではなく、その場所の温度を示していると思われます。

7日になって東電も温度上昇は認めたものの、そこで何が起きているかはまったくわかりません。

専門家は、溶融燃料か内部の構造物が崩落して発熱した可能性もあり、水蒸気の発生で外部への放射性物質の放散が増加した可能性も指摘されています。

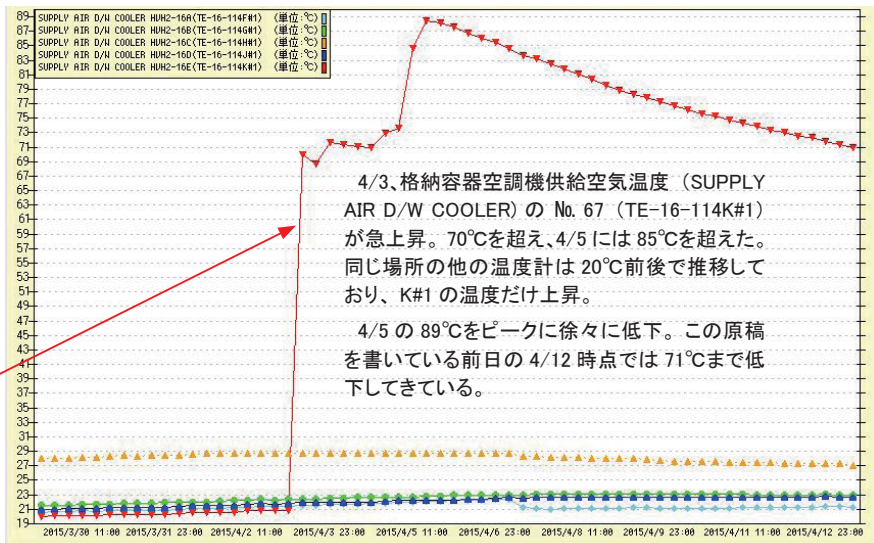
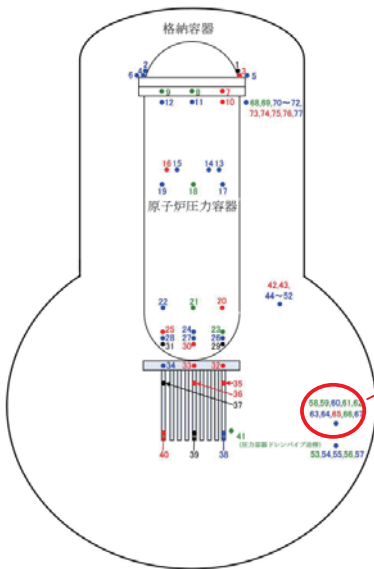
今のところ、福島第一原発周囲の空間線量の上昇は確認できていません(原子力規制委員会でも一部線量データの取り違えで騒がれましたが・・・)。

生協の方で見ている茨城県放射線テレメーター監視局の東海村周辺の10分単位のデータでも4/3日以降の空間線量率の上昇は確認できていません。

福島第一原発1~3号機は、メルトダウンで燃料棒が溶けて压力容器の底を抜けて格納容器の底に溜まって(デブリ)おり、崩壊熱を発生していて、大量の水を注入し続けて冷やし続けないと、再び臨界が起きる可能性もあります。

容器の下部も水で埋まっていて、放射能に汚染された汚染水をくみ上げて再循環させても、なお容器が破損しているために水が漏れている状態で、東電は海洋への垂れ流しをし、政府もそれを容認している状態です。

このような状態で「アンダーコントロール」(安倍首相)などとは、空いた口が塞がりません。再び何が起きるかわかりませんから監視が必要です。



1号機に入れた調査ロボット、2時間で行方不明

4月10日、炉心溶融した福島第一原発1号機の格納容器の直径10cmの穴からロボットを入れて初めて内部の調査をしたものの、わずか2時間足らずで行方不明に。

このロボットは電力会社や原発メーカーがつくる「国際廃炉研究機構」が国の補助(いったいいくら税金で補助したのか!)を受けて日立GEニュークリア・エナジーの工場(茨城県日立市)で開発されたもの。

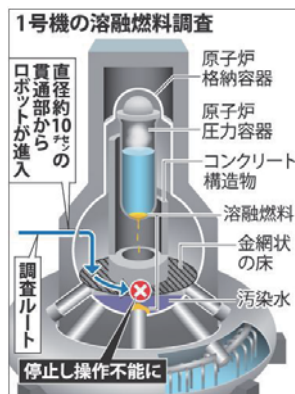
強い放射線が電子器機に障害を発生させるため搭載カメラの寿命は10時間とされていた。



さて実際は、格納容器に潜入してわずか2時間で行方不明(走行不能?)となり、東

電は13日ロボットの回収も断念し、ロボットにつないでいたケーブルを切断しました。

4年が経過してもなお、原子炉の中にロボットさえ入れない状態で事故の現場検証もできていないのに、「原発再稼働」とはあきれた国だ。



1 行方不明になる前に送ってきた格納容器下部の写真の1枚

←毎日新聞より